あれもこれも真宗由来のことば

湖北は「ごえんさん」文化圏

お寺のご住職を呼ぶ言葉は、ふだんは家とお寺の間だけで使うもの。だから他宗派やほかの地域でどう呼んでいるかは気に留めない。だが、そこにはさまざまな呼び名があった。それを探ってみようと、み～な取材班は全国調査を試みた。

湖北らしい「赤ちゃんもらわはった」

ネイティブな湖北人が、隣近所や友だち同士で何気なく使っている言葉には、フワッと包み込むような柔らかさがある。例えば「赤ちゃんをもらう」とか「母がまいらしてもろた」といった表現だ。

ところが文化圏が異なる人たちにとってはハテナマークが頭の上に立った状態になったりする。たとえばこんな風に。

「夕べ、母がまいらしてもらいましたんや」

「そうでしたんか、寂しなりますねぇ」

そんな会話をそばで聞いた異文化圏の人は少し驚く。

「おばあさんがお参りに行っただけなのにそんなに寂しがらなくてもいいと思うけど」と。

もう一つの例だ。

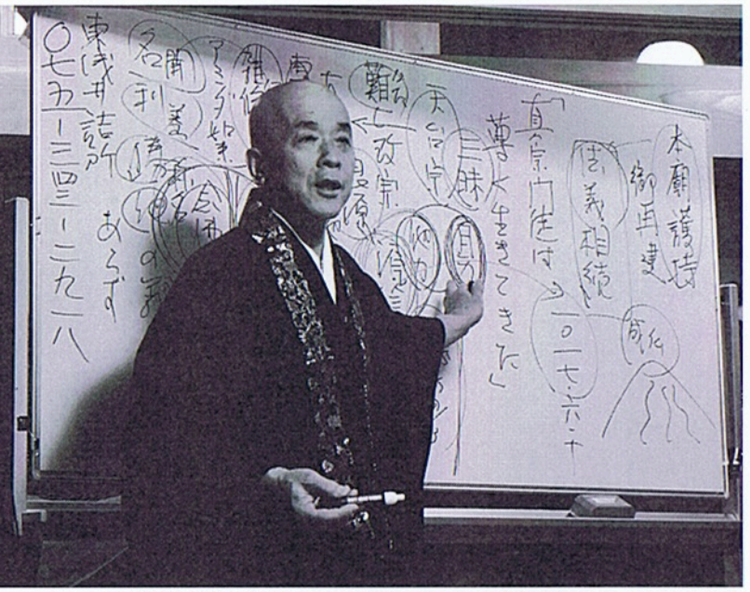
「Aさんとこ、赤ちゃん、もらわはったんやて」

「ほうか、そらよかったなぁ」

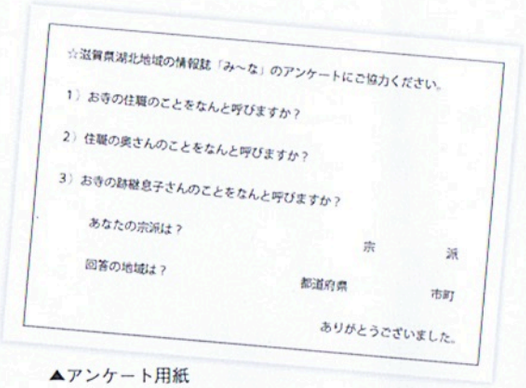
その会話に異文化圏の人はかなり驚く。

「…ええっ！　そんな簡単に赤ちゃんをあげたりもらったりしていいんですか」と。

湖北弁というと「やんす」「こんす」が君臨しているが、真宗文化に由来することばも多い。「赤ちゃんもろた」「まいらしてもらう」は、その代表的な例だろう。念のため前者は「出産した」「赤ちゃんが無事に産まれた」という意味だし、後者は「亡くなった」という意味だ。



▲法要でお説教をする「ごえんさん」（満徳寺の佐藤義成さん）



☆滋賀県湖北地域の情報誌「み～な」のアンケートにご協力ください。

1）お寺の住職のことをなんと呼びますか？

2）住職の奥さんのことをなんと呼びますか？

3）お寺の跡継息子さんのことをなんと呼びますか？

あなたの宗派は？　　宗　　派

回答の地域は？　　都道府県　　市町

ありがとうございました。

▲アンケート用紙

いろんな呼び方がありそうと調査

なら湖北でよく使われる「ごえんさん」という言葉はどうだろう。毎月、お寺の住職がお勤めに来られる「月参り」は、今なお多くの家でおこなわれている。それがなくなっても、先祖の祥月命日やお彼岸、お盆などに住職にお参りしてもらう家は少なくない。

「今日は〝ごえんさん〟が来ゃはるさかい、仏さんの前を片付けといてや」

湖北に住む真宗門徒の家では、そんな会話が月並みで交わされていたりする。「ごえんさん」という住職の呼び名は、空気のような言葉だ。

と思っていたら、奥さんに「米原の実家は〝ごいんげさん〟と呼んでるわ」と聞いたり、湖北へ引っ越してきた知り合いに「わが家では〝おっさん〟です」と教えられたり。

「ごえんさん」は、湖北の浄土真宗門徒だけにしか通じない言葉かもしれない。編集会議で議論するうちに、そんな疑問が湧いてきた。そこで、この際そのあたりを解いてみようと、アンケート調査をすることになった。

私たちと仏様を繋いでいただく住職の呼び名は、地域によってどう違うのか。他宗派ではどんな呼び方があるのか。合わせて、住職の奥さんと跡継ぎ息子さんの呼び方、そして宗派と出身地を聞いてみることにした

さまざまな地域と宗派から185の回答

急な発案の調査だったため、サンプル数や地域に偏りがあるが、み～なスタッフが手分けしてSNSにアップしたり、友人、知人に尋ねたりして調べた結果、185件の回答が得られた。アンケートに応えてくださったみなさん、ありがとう！

地域別の数は図1のとおり。滋賀県が全体の約半分を占める。内訳は湖北が58件、その他の県内が29件。全国レベルでは関西と北陸が相対的に多い。

宗派別でみると、予想どおり浄土真宗が断然多く全体の約半分。内訳は図2のとおりだ。地元の滋賀県を省いて比較しても浄土真宗の多さは圧倒的で、文化庁の統計（4ページ参照）よりはるかに高い比率だ。

浄土真宗と答えた人の地域は、図3のとおり滋賀県以外は北陸と東海が多い。滋賀県、北陸、東海は真宗王国といわれているが、この小規模なアンケートでもくっきりとそれが表れている。

浄土真宗の各派の内訳は図4のとおり。真宗

よもぎ餅
柳谷製菓舗
長浜市川道町
TEL 0749(72)2043

「プロジェクト24」からの発進、発進！「長浜教区第24組」

生活様式の変化とともにお寺との関わり方が変わってきたのは門徒だけではない。お寺の側にも改革や見直しの風が吹いている。長浜教区内で唯一、組のホームページを開設している第24組の取り組みをたずねた。

▲「心配せんでも、若い人に任せられるので今は適当にサボっています」と、24組の活動を支える秦信映さん

宗教の実感が薄れてきた

「よその家を訪問したときは、まず最初に仏さんに挨拶する、おさい銭は半紙に包むなどは、湖北の土徳の表れですね」と語るのは、明徳寺（木之本町黒田）の住職、秦信映さん。大きな体からおだやかな人柄が伝わってくる。

「生活のなかにお仏壇やお寺の存在があった時代は、だれもが同じように仏さんに近い意識を持っていて、宗教のあるくらしの実感がありましたが、今はどうやって伝えていくか危惧されます」。

宗教が身近にあったことは、たとえば「もったいない」「おかげさん」「やすんでもらう」などの言葉が、日常、飛び交っていたことからも分かる。子どもたちは、毎朝、お仏壇に手を合わせる祖父母たちの姿からも、自然に宗教的なモノゴトを受け取っていたわけだ。

考え方が多様化した現代は、そういうわけにはいかない。同じ屋根の下で暮らしていてさえ、生活の時間帯がズレていることもしばしば。地域の中心にあったお寺とのつながりも、だんだん弱くなってきた。

それを解消する力が、お寺を通してつくられる「組」というコミュニティの中にあるはずだと秦さんは言う。

個々の寺から組へ

「寺の行事や教化事業も、単独でおこなうだけでなく組という単位での取り組み方が、現代の生活様式に適していることが増えてきました」と秦さん。

長浜教区には、第12組から24組までと敦賀組の計14の組に、別院を含み391ヶ寺が所属している。24組は、旧伊香郡内の木之本町、余呉町と高月町西部の30ヶ寺で構成されている。

以前、24組には各寺から選出された人によって壮年部が結成されていたが、寺の役員が選ばれたり、部員が高齢化したりと、本来の活動ができなくなっていた。そこで新しい組織を作ろうということになり、今までのような各寺からの選出ではなく、個々にやる気のある人を勧誘することになった。

2016年7月、明徳寺の「若葉会」の会員やPTAでつながった仲間など、40、50代の10数人によって、プロジェクト24が発足した。若手の発想を引き出そうという意図をもつプロジェクトには、他宗派の人も含まれていた。彼らは、翌年開催された「同朋のつどい」の中心的役割を果たすことになる。

また、新しく合唱団も結成された。仏教用語にちなみ「山河サンガ」という。教区内の坊守さんや門徒の女性有志らによる合唱団「花あかり」や、明徳寺の「紫雲ハーモニー」の団員が土台となり、山河サンガには約50人が参加した。「仏教讃歌など、いい歌がたくさんあるので、気軽に口ずさめる歌を普及したい」という思いで、組の組織のひとつに位置付けられている。

▲プロジェクト24の研修会で秦さんから荘厳の作法などを学ぶ

▲同朋のつどいの昼食には地元の店舗が協力

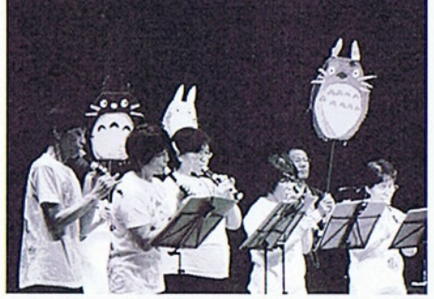
門徒と寺がつながった同朋のつどい

「同朋のつどい」は、2017年6月、「つながりがあって生きる幸せ」というテーマのもと、木之本町のスティックホールを会場に420人が参加して開催された。24組では、前年に本山が主催した「元気なお寺づくり講座」を受講しており、同朋のつどいは、その具体的な実践の企画でもあった。

日曜学校生が導師を勤めて全員でお勤めをしたあと、川村妙慶さんの講演会、地元企業に依頼したメニューでの昼食。午後は合唱発表、コマ回しやあやとりなどの昔の遊び等々、大人も子どもも楽しい一日を過ごした。

「真宗門徒でない人もスタッフになって、いきいきと活動してくれました。この活動によって、それぞれに新しい人脈ができたようです」と秦さんの顔もほころぶ。

また、いつでもだれでもアクセスできる情報発信ツールとして、ウェブサイトを立ち上げるお寺も増えてきた。24組では、2ヶ月に1回広報紙を発行し、全戸配布していたが、もっと幅広く、若い世代に向けても発信しようと2017年11月より、明徳寺若院である秦信明さんが中心になってホームページを立ち上げた。現在は、沿革、事業計画　各寺の法座・行事案内、同朋大会や門法会、門徒研修会などの活動報告といったコンテンツを2人の門徒さんとともに管理している。「将来は、組内のお寺を紹介したり、山門前の標語を載せたりしたいと思っています」と信映さん。



▲ステージでは合唱、リコーダーやハンドベルの演奏などがおこなわれた

▲東本願寺のキャラクター「赤本くん」たちも登場

●長浜教区第24組ホームページ
http://nagahamakyouku24.main.jp/concept1.html

組全体で情報の共有を

どこのお寺も、門徒の高齢化や仏事への参加者の減少、お寺の後継者不足など、多くの課題を抱えている。将来への不安要素がたくさんあるにもかかわらず、他の寺の事情には疎いのが現状。お寺同士の横の連携を強くし、それぞれが抱える課題の情報交換も、今、必要とされていることだ。そこで、24組では、各寺で工夫している方法などを教え合い、組全体の質を底上げしていこうとしている。

また、寺から門徒への情報を具体的に発信するようにしたという。たとえば、法話の案内には、日時や布教者の名前だけでなく話のテーマも載せるようにした。内容に興味があれば、自発的に参加する人も増えるはずだ。

このように活発に活動する24組だが、「私たちの取り組みの前には、先輩たちがつけてくれた道筋があるから、こうやって進んで行くことができるのです。時間のかかることですが、これからも続けていきたい」と秦さんは次世代に信頼を寄せている。

湖北にはお寺が多い。人口に対する割合は滋賀県が日本一というから、お寺の存在は、わたしたちにとってあたりまえの風景かもしれない。だけど、ふと目に入った門前の標語が気に掛かり、立ち止まることがある。お寺からの発信を受け止めている瞬間、といってもいいだろう。

（メイ）